

# 花ちゃん、オー君、モント博士のわくわくドキドキ冒険記2

国立市立国立第七小学校

平成27年1月30日 NO.80 (180)



カワセミ

オー君 「うわあー！きれいな鳥とりだな。」

花ちゃん 「この鳥とりはね、カワセミというのよ。ステキな鳥とりでしょ。『川の宝石かわ ほうせき』とか、『水辺の宝石みずべ ほうせき』とか、『青い宝石あお ほうせき』とかい言われているのよ。」

カワセミ君 「おっと……。だれだい、おいらの名前なまえを呼んだのは……。静しずかにしてくれないかな……。これからダイビングキャッチして、えさこさかなの小魚とを取るところなんだから。」

花ちゃん 「あ！ごめんなさい。カワセミ君くんがとってもきれいなので、オー君くんと感心かんしんしていたところなんです。」

カワセミ君 「まあ、そうだろうな。おいらほどきれいな鳥とりは、まあいないだろうな。」

オー君 「カワセミ君くんのようなきれいな鳥とりは、国立くにたちにもいるのですか。」

カワセミ君 「まあ、国立くにたちえき駅のほうにはいないけど、谷保やほの近くちかにはしょっちゅういるよ。」

オー君 「それじゃ、ぼくたちもカワセミ君くんにああえるんですか。」

カワセミ君「そうだな、今は多摩川からの水を止めているけど、春から秋にかけてなら、谷保天神うらのハケ下の水辺で魚をつかまえているから、おいらに会えるよ。そういえば、この前、国立七小の校長先生がおいらの写真をとっていたよ。」

花ちゃん「そうなんですか。それじゃ、いつかお会いさせてください。ところで、カワセミ君は、どうしてそんなに口ばしがとがっているの。」

カワセミ君「よく聞いてくれたね。おいらは水にもぐって魚を取るだろう。そのために、口ばしが細くとがっているのさ。」

オー君「ふーん。口ばしがとがると、そんなにいいの。」

カワセミ君「そうだよ。水の抵抗も少なくて魚もゲットしやすいんだ。新幹線の先がとがっているだろう。それは、おいらの口ばしをヒントにしたそうなんだよ。」

オー君「へえー、そうなんだ。それから、どうしてそんなに青くきれいななの。」

カワセミ君「まず、おいらはしょっちゅう魚を取っているけど、それでも、いろいろな危険なことがあるんだよ。」

花ちゃん「危険なことって、どんなことですか？」

カワセミ君「生き物の世界にはね、『食って食われる』つまり、『食物連鎖』と言ってね、まあ、むずかしいお話しはしないけど、おいらだって、タカやワシの仲間にならわれる危険があってね、水の青さと同じようになっていけば見つかりにくいんだ。それから、青くキラキラ光るのも身を守るための理由だね。」

花ちゃん「そうか、だから、カワセミ君は青い体で水面ぎりぎりに飛ぶんですね。」

カワセミ君「そうなんだよ。あのね、それから、青く見えるおいらの体にも秘密があるんだよね。」

花ちゃん「秘密？何なの？」

カワセミ君「おいらの体が青く光って見えるのは、CDのうらに色がついていないのに、虹のようにきれいに光ったりするのと同じなのさ。」

モンタ博士「その通りさ。タマムシやモルフォチョウが青く光るのと同じなんだ。色には、色素色と構造色とあってね。高校生くらいになったらお勉強するけどね…。」

カワセミ君「モンタ博士！そんなむずかしい話やめな。それよりおいらを見つけにおいで。」

花ちゃん・オー君「そうだ！みんなで『青い鳥』をさがそう！」